

漢語近世音のはなし----(2) 入声韻尾の消失

中村雅之

§ 4、/-p, -t, -k/の消失

中古音の韻尾(=音節末音)には、以下の九種があった。³

韻尾なし /-ϕ/

母音韻尾 /-i, -u/

鼻音韻尾 /-m, -n, -ŋ/

入声韻尾 /-p, -t, -k/

以上のうち、入声韻尾/-p, -t, -k/が近世音にはない。この三種の入声韻尾の有無こそが中古音と近世音を分かち指標ということになる。中古音の入声韻尾に確かに三種の別があったことは、前期中古音を反映する日本吳音、後期中古音を反映する日本漢音と敦煌出土のチベット文字漢語資料、さらには朝鮮語やベトナム語の漢字音などによって確認される。音声的には現代方言(広東語など)の状況から見て、息による破裂を伴わない内破音の/-p, -t, -k/であったと考えられている。

元代の『中原音韻』(1324)では、中古の入声字はすべて他の声調に振り分けられている。したがって中古音的な入声韻尾は全て消失したと見なしてよい。かつては元代の入声に声門閉鎖音[ʔ]を想定することもあったが、少なくとも北京を中心とする北方音については、それを裏付ける資料がなく、近年ではそのような論はほとんど見かけなくなった。『中原音韻』の音韻体系の研究として、現在でも頻繁に利用されている楊(1981)⁴では、「十(中古-p)」「失(中古-t)」「石(中古-k)」を一様に[ʃi]とするなど、入声韻尾を完全に消失したと見なすが、調類としてはなお一定の調値を保って独立した類を形成していた可能性があるとする。検討に値する説であるが、残念ながら細部を確認できる同時代資料がない。

3 このうち、/-ŋ, -k/については、韻書における韻の数が非常に多く、16撰の分類でも、通撰、江撰、宕撰、梗撰、曾撰を含む。それゆえ、さらに細分化するのが自然であるとして、通撰に円唇性の韻尾を想定したり、梗撰に前よりの韻尾を想定したりするなど、いくつかの論があるが、ここでの議論には関係しないので詳しくは触れない。

4 楊耐思(1981)『中原音韻音系』, 中国社会科学出版社。

§ 5、パスパ文字資料

元代の対音資料の代表は、1269年公布のパスパ文字によって記された各種資料である。チベット人僧パスパ('Phags-pa)の考案になるこの文字は数種の言語を記したが、現存する資料のほとんどはモンゴル語と漢語である。漢語を記したパスパ文字資料の主なものは以下の三種である。

①『蒙古字韻』(韻書風の構成で漢語の全音節を綴ったもの)

②『事林広記』所収「百家姓蒙古文」(「百家姓」にパスパ文字表記を加えたもの)

③皇帝聖旨碑文(漢語を記したものとモンゴル語聖旨中の漢語語彙がある)

これらの資料に見られるパスパ文字漢語の綴りは基本的に全て同じ方式である。つまり、パスパ文字漢語の正書法はどの資料においても厳格に守られていると言ってよい。問題の入声韻尾については、中古音風の/-p, -t, -k/はもちろんのこと、声門閉鎖音の存在をうかがわせるような如何なる韻尾も記されない。「十」「石」はともに「sɿ」と綴られ、「失」は「sɿ」である。⁵ (声母の表記が異なるのは、パスパ文字が形式上清濁を区別していることによる。)

§ 6、契丹文字資料

契丹人の遼朝において、920年に契丹大字、その数年後に契丹小字が制定された。それらの文字は今なお解読途上にあるが、漢語語彙を記した部分についてはかなりの程度状況が明らかになっている。清格爾泰等(1985)⁶によれば、契丹小字は漢語語彙の各音節を通常2~3の要素で表音的に綴っている。中古音で/-p, -t, -k/に終わっていた音節については、以下の通り入声韻尾の痕跡は見えない。

密m-i/室ʃ-i (これらの「i」は非入声字「西/礼/儀」などにも用いられる)

国k-uei (この「uei」は非入声字「水/内/圭」にも用いられる)

略l-iau-u/洛l-au-u (これらの「u」は非入声字「道/吾/右」にも用いられる)

以上の例を見ただけでも、入声韻尾を表記しようという意図のないことは明白である。さらに、上の入声字の音形が元代のパスパ文字によるものと極めて近いものであることにも注意すべきであろう。つまり、10世紀北方において契丹小字が表記した漢語の体系は、13~14世紀にパスパ文字が表記した体系と大差ないものであった。本稿において、近世音の範囲を10世紀の遼代にまで引き上げる所以である。

5 パスパ文字の転写方式は吉池(2005)による。

cf. 吉池孝一(2005)「パスパ文字の字母表」『KOTONOHA』37.

6 清格爾泰等(1985)『契丹小字研究』, 中国社会科学出版社。

§ 7、ハングル資料の入声

初期のハングル資料の中には、北方漢語の表記にもかかわらず、入声韻尾(らしきもの)を明示しているものがある。『洪武正韻訳訓』(1455)の「俗音」、そして『老乞大』『朴通事』の第1次諺解本(いわゆる「翻訳老乞大・朴通事」、16世紀初頭)の左側音(各漢字に対する左右二種の音注のうち左側の音)である。しかしこれらは範疇としての入声を意味しているだけで、実態としての短促調を表したものは考えられない。用いられる入声韻尾には二種があり、一方は影母と同じ「ㄷ」(ʔ)⁷、もう一方は非敷母と同じ「ㅍ」(v)で表される。前者の「ㄷ」は、その位置に/-p, -t, -k/という韻尾が「ない」ことを意味し、後者は「ㅍ」(w)と同じく、母音韻尾/-u/を意味する。⁸

以上のハングル表記が見かけ上の入声韻尾を有するにもかかわらず、当時の北方音を表していることは、その韻母の音形によって明らかである。旧入声字の「角」(giav /kiau/)や「北」(byi' /pəi/)などは元代のパスパ文字表記と同じ音形であり、当時の南京などの官話音とは全く異なっている。

§ 8、その他の対音資料

明清のローマ字資料の中には明らかに短促調の入声が独立した声調として記されているものがある。ニコラ・トリゴー (Nicolas Trigault) の『西儒耳目資』(1626)やジョゼフ・エドキンズ (Joseph Edkins) の『官話文法 (A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect)』(1857)などである。これらは北京語やその周辺の北方音を代表するものではなく、官話(広義の南京官話)の音系を示している。明清代に宣教師によって表記されたローマ字資料は、ほとんどが官話を表記したもので、南京の発音を標準的なものと見なした。⁹ 本稿で、北京音を中心と

7 ハングルのローマ字転写は河野六郎式による。以下同。

cf. 河野六郎(1947)「朝鮮語ノ羅馬字轉寫案」『Tōyōgo Kenkyū』2, 『河野六郎著作集1』(平凡社1979)所収。

8 詳細については中村(2006a)を参照。なお、左側音と右側音の性格については中村(2006b)を参照。

cf. 中村雅之(2006a)「翻訳老乞大朴通事の左側音の入声表記について」『KOTONOHA』41。

cf. 中村雅之(2006b)「翻訳老乞大朴通事の右側音」『KOTONOHA』42。

9 官話の性格については、以下の論文を参照。

cf. 高田時雄(1997)「清代官話の資料について」『東方學會創立五十周年記念東方學論集』。

cf. 古屋昭弘(1998)「明代知識人の言語生活 — 万暦年間を中心に — 」『現代中国語学への視座 — 新シノロジー・言語篇』。

する近世音から、これらの官話資料をひとまず除外することはすでに述べた。北京語と官話を区別して考えることは、近世音の理解にとって重要である。本稿で扱う近世音は『中原音韻』に見られるような四声体系(陰平声、陽平声、上声、去声)であるが、明清の官話は声門閉鎖音を伴う入声を加えた五声体系である。